

2026年8月6日～7日 広島レポート



HIROSHIMA Atomic Bomb Dome standing here for you.

Peace Art by Sayoko Tsutsumi



Reported by Sayoko Tsutsumi

この企画に参加するきっかけは、2026年のあるとき、堤佐代子より、平和教育に参加したいと思っていることを、広島の平和教育に長年係わってこられた堤寛と医学教育で旧知の広島大学医学部元教授、井内先生に話したことがきっかけで、「8月6日広島原爆の日にイスラエルの高校生が参加し、そのあと日本の高校生と原爆について勉強会を行うことになったが、参加してみますか？」と打診を受け、「ぜひとも参加したい」と回答して実現しました。

【参加者】

井川アティアス翔(教員)
David Siman Tov(M)
Mai Siman Tov(F)
Lior Kanie(M)
Noam Kanie(M・卒業生) 計5名

【日程】

8月5日(水) 夕方 広島到着

8月6日(木)

6:00 平和祈念式典に参列(予約終了)(井内担当)

昼食【会場】アルマンドリーノ(イタリア料理)

午後 国際会議場の行事

- ・ひろしまのこころを世界に
- ・基町高校の絵画展
- ・舟入高校演劇部の原爆劇

夕食【会場】しゃぶ葉(しゃぶしゃぶ)

8月7日(金)

10:00 舟入高校(7名の高校生)との対話集会

原爆投下についてどう考えているか、
被爆者の話を聞いて考えたこと

昼食【会場】むさし本店

14:00 原爆資料館の見学

16:10 広島電鉄(原爆ドーム前→広電宮島口)

16:55 宮島着(フェリー)

17:00~19:00 厳島神社参拝

19:30 フェリー(宮島→宮島口)

堤佐代子が描いた油絵を絵はがきにして、イスラエルから広島にいらした高校生らへのおみやげにしました。（表紙の広島ドームと下記2枚）



TSURU prays for peace around the world

Peace Art by Sayoko Tsutsumi



**HIROSHIMA Atomic Bombed Tree
is alive now in the light and on the wind**

Peace Art by Sayoko Tsutsumi

2026年8月6日広島平和記念式、朝7時半頃の様子。会場に向かう学生らも多かった。
会場では、セキュリティーチェックがあり、チェック済みのバンドを腕に巻いた。





初日、自己紹介、昼食はイタリアンレストランで。それぞれが、自己紹介をしました。だんだんと打ち解けていくムードでした。初対面のグループでは、笑顔で、話すなど、さりげない会話をすることで、ひとは、和めます。イスラエルから広島に来た高校生4人と教員。それぞれが、両親のどちらかが日本人であるというハーフの子達。イスラエルは、いま、戦争のこともあって、世界の国家間の関係でみると、どちらの味方？ というような風潮バランスでその国をみる傾向があるが、しかし、どの国の人も、人間として、戦争が好きなどはないと思います。何故、国家は争うと戦争に発展してしまうのでしょうか。何か難しい争うような問題があっても、関係が悪くても、戦争などしないで、歩み寄り、話し合い、楽しく笑い合えば、仲良くなれるはずです。歩み寄りとは、ひとを大切にするのではないのでしょうか。今回、被爆81年にして、愛知県から広島の平和祈念式とこの国際交流に参加してみて、「広島は、悲しみと苦難を乗り越えて、長年世界平和を祈念してきたまち。世界平和を目指す発信地は広島・長崎しかない」と確信しました。





舟入高校の学生さんらと交流。同世代の学生らは、すぐに打ち解けて、たった2時間でも親しく交流できることは素晴らしいことです。このことを実現できるように尽力された先生がたは、素晴らしいです。特に、音楽やお習字という、何かを一緒に行う体験というものは、そのことを通じて、共同作業することで、仲間になれるものですね。リーダー的な学生が、誰もが参加できるようにアプローチするプロセスもありましたね。素晴らしい。



2026年8月7日、原爆ドームを背景に、イスラエルからの高校生4人と教師、そして、国際交流案内役の末廣さんは、南山大学の後輩であると判明したが、広島でこのような形で、母校の同窓生と出会えたことは、私にとって、とても嬉しい出来事でした。私は、広島で国際交流活動をする末廣さん、イスラエルから高校生を引率しスタディーツアーを実施する翔先生らに出会って、私ごとですが、私が高校生のとき、先生の指導で、海外のみなしごへ募金活動をするのを生徒会で熱心にした記憶、大学卒業後、母校から同窓生への声かけがあって、愛知国際病院に毎年滞在するアジアからの研修医の日常生活をサポートするボランティア(主に買い物や近くの観光案内)を熱心にしたこと、主人とは、タイへのスタディーツアーで孤児を養育するお寺や学校を視察し、教育支援に係わったこと、主人の教え子医学生を国際病院のボランティアに連れ出したら、英語を話せるようにしたい、ボランティアしよう、と、目覚めて、医学部にボランティア部を結成した学生さんは、いまや立派な女医さんになっています。そんな過ぎし日のことを思い出しました。きっと、いま広島に来たイスラエルの高校生達は、大人になって広島のことを思い出したりして、「戦争はしちゃだめだよ」「核はだめだよ」という大人になっていると思うのです。出会いは人生。経験こそ人生そのものとなるものなのです。